

# 禅のブームは一時的なものではない

善光寺海外留学僧の第一期生として渡米して早くも

三ヶ月が経過しました。まだまだ言葉にもなれず、日本のスケジュールをこなしてゆくことが精一杯といったところなので修学面の報告は後日送ることにして、今回とりあえず簡単にアメリカにおける仏教の状勢と、安居している道真寺のことを報告させていただきます。

—

めてかと思います。

その序文に、次のように述べてあります。  
「二十五年前には東南アジア諸国を除くと仏教センターを見つけることは非常に困難でしたが、今や十九のアジア諸国と同様にヨーロッパ諸国、南北アメリカ、中近東アフリカ、オーストラリアなど四十四ヶ国に仏教センターがあります。」そしてこの名鑑には六十三ヶ国にある一八〇〇のセンターのリストがとりあげてあります。

これを見ただけでも、私達が手をこまねいている間

昨年、ロンドンから『INTERNATIONAL BUDDHIST DIRECTORY』(世界仏教センター名鑑)なる小冊子が発刊されました。この種のものとしてはおそらくはじ

に、真摯な仏教者が国外に進出して、いかに仏教伝道に尽力してきたことが、まだ、世界の多くの人達が仏教に拠所を見い出そうとしているかがわかると思います。

内容はきわめて不完全のもののように思いますが、上座部仏教（小乗仏教）、韓国仏教の進出とともにチベット仏教の進出が目につきます。

これは中国によるチベット支配が大きく影響していることと思いますが、世界の人達の中にそれを求める動きのあることも否定出来ないところであります。

（私のいるニューヨーク州道眞寺の近くにも大きなチベットの僧院があり、東海岸の多くの人達が集まつてくるようです。）

次に今一つの大きな特長は、日本の禪（臨濟・曹洞）が世界の各地にセンターを開設して活動していることです。アメリカ（U.S.A.）についてだけでも約百ヶ所のセンターのうち三十が日本の禪関係のセンターになっています。一説には、米国には八〇〇の仏教センターがあり、そのうち一〇〇が禪関係だともい

ます。こうした大きな数字の開きがあるだけでも、流動し、発展しつつあることがあります。

とにかく、こうした世界的な仏教運動とでもいうべき大きな文化の流れの中にアメリカに禪が着実に根を下ろしつつあるのはまちがいないところであります。

さて、少し具体的な事例をあげますと、私達、道真寺の六人のメンバーは七月一日、大菩薩禪堂十周年の法要に招かれました。国際山大菩薩禪堂金剛寺は一九七六年の七月四日（アメリカ独立記念日）開堂になり、慶讃法要が営まれました。日本からは奈良薬師寺の高田好胤管長が一山の大衆と信者を同伴して随喜され記念講演を行われました。多くのアメリカ人の参禪者はもちろん日本の他宗の開教師の方達も列席された盛大なものでした。式典の最後に高田管長は玄辨三藏の前後十八年にわたる求法の旅の話をされ、仏教が東漸しそれが今、太平洋をこえてアメリカに花を咲かせたと祝辞を述べられ、また、大菩薩禪堂の嶋野栄道老師は

世界的な歴史学者アーノルド・トインビー氏の「将来、

歴史学者が集まつて二十世紀とはどういう世紀であったのか議論した時、政治や経済や戦争のことではなく、

仏教が西洋にもたらされたことが一番大きな意味のあることになる」という言葉を引用され、困難なことがあるとその言葉を思い出して禅の普及に力を尽くしていると挨拶されたのでした。

この大菩薩禪堂は、釈宗演、鈴木大拙、千崎如幻、

安谷白雲といった先人の地道な弘法の努力を経て、三島市竜沢寺の中川宗淵老師の時、アメリカ第二の製鉄会社副社長ビル・ジョンストン氏（靈石居士）の力を得て一九七六年建立されたもので、臨濟禪はニューヨーク州の山中、（注1）広大な自然の中にその基盤が造られたのであります。

一方、曹洞禪は從来日系人のためにあつた桑港寺（サンフランシスコ）の第六世として赴任された鈴木俊隆師の時になつて広くアメリカ人の中に教線が拡張されて、タサハラの山中に禪心寺（本格的な修行者の道場）を開山され禪の生活実践道場として曹洞禪の基

盤が確立されました。

そして、今私のいる道真寺は、前角博雄老師（注2）の法系を嗣いだジョン・大道・ローリー師の道場であり、同じ会下のグラスマン徹玄師もニューヨークに禅センターをかまえておりますし、その他にもすぐれた人達が各州にちらばり禅センターを造つてゐるのが現在の状況なのが現状です。

（注1）アンクル・トムズ・キヤビンの著者で有名な Harriet Beacher Stow 夫人の住んでいた家のあるビーチャー湖はお寺のすぐ前にあり、その周辺一帯二百万坪が寺領である。ちなみに道真寺は二十四万坪の寺領をもつ。

（注2）曹洞宗黒田白純師の法を嗣ぐとともに原田祖岳—安谷白雲老師に学び、一方臨濟禪を宇坂光龍老師より学ぶ。

二

私の安居している道真寺はニューヨーク市から車で二時間程北西のマウント・トレインパーにあります。も

とキリスト教の修道院を買いつたもので禅センターとして六年の歴史を持ち、指導者は前述のように大道師であります。山内の大衆の在り方は日本とはだいぶ違っています。実際にモンク（修行僧）としているのは数名（注1）で他は居士・大姉といったところで常に二十人位が修行しています。この寺のメンバーになるには、この寺または他の場所でそれなりに弁道し、納得した人、つまり発心の人達ばかりで、メンバーとして認められるためには旦過寮に一日坐ることが義務づけられており、それから一年以上たつて、本人の希望により授戒（注2）が行われるのであります。

そして更に一年以上たつて得度ということになりますから、坊さんになっている人は既に最低二年は修行した人達ということになります。

さてここで修行のあり方ですが、三ヶ月間の安居期間が二回と、三ヶ月づつ二回の解制期間があるのは

日本と同じですが毎月接心が行われており、修行者の機根に応じて公案禪、あるいは只管打坐が指導されて

います。制中の日常は暁天坐禪二炷、朝課、作務、日中諷經、作務、坐禪、晩課、夜坐と基本的には日本と全く同じであります。（解制中は日中諷經日中坐禪、晩課はなし）お経は般若心經、參同契、食事訓等、すべて英訳されたものを読み、大悲心陀羅尼、消災呪、延命十句觀音經は日本と同じように誦誦しています。そうした日常の中に朝晩独参（INTERVIEW）が行われ、修行者はそれぞれ老師の部屋に入り、個人個人具体的な指導を受けるわけであります。

日本と違っていることにサンデー・サービス（日曜礼拝）があります。（注3）この日は信者の人達が集まつてきて、九時から三十分程のお経を読み、二炷の坐禪（はじめての人の為には初めの一炷の間、別室で指導が行われます）提唱が行われ、碧巖録、無門関、伝光錄などがよく話されています。

そして、特に道真寺は禅アート（芸術）を重視してWORK SHOP（研修会）、坐禪そのものの研究会の他に、お茶、お花、墨絵、空手などの関心のある人達

を集めてその研修とともに坐禅をさせています。そして参考して来る人達の寄附金や会費とが道真寺の経済を支えているようです。

こうして道真寺は日曜のたびごとに、あるいは研究会の度毎に次から次へと多くの人が訪れ、あるいは一週間とか一ヶ月とか安居期間のみとか滞在して修行する人達もおり活気にあふれています。

最後にここで感じた大きなことの一つは、翻訳されたお経文や偈文が大変解りがよいということであります。お経というと解らないことの代名詞のように思われておりますが。

アメリカは人種のるっぽだといわれる程、多くの人種がおり、従つて生活様式や価値観の違い、そして徹底した個人主義の国であることが大きな理由であると思いますが、本屋をのぞきますと、インド、チベット、中国、韓国、日本等の仏教書が沢山並べられており、多くの人達との会話の中からも感じられることは相当しつかり仏教を勉強した人達が禅に入つてきているよ

うに思います。そういう点からもアメリカの禅は決して単なる一時的なブームではないと思います。

(注1) 日本のように檀家制度による財施はありません。また托鉢ということもございません。従つて坊さんとして生きてゆく為には本当に精神的な指導者として自己を確立しなければなりません。その覚悟がない以上、坊さんになれないのが実状であると思われます。

(注2) 安居して一ヶ月位の時、お授戒の儀式に参列することができました。四人の人が戒を受けたのですが作法は日本に準じたものですが、懺悔文にしろ十六条戒にしろ皆英訳されていますから解りやすいこと、そしてそれぞれの人に綴子と漢字による法名が授けられて、その意味を話して聞かせるといった具合で非常に感銘を受けました。

(注3) 坊さんだけでなく一般の人達もすべて同じよう立つて礼拝をします。日本では在家の方達はそれをしませんが大いに学ぶべきところがあると思います。

